

パリ・モードにおける服飾造形研究 3 —1957年前後制作デイ・ドレスの造形—

A Study of Fashion Creation in Paris Mode 3:
Day-Dress around 1957

安部 智子 水野 真由美 森 淳子 林 綾美 平野 紗江
ABE, Tomoko MIZUNO, Mayumi MORI, Junko HAYASHI, Ayami HIRANO, Sae

I はじめに

現代のファッションは、第2次世界大戦後のパリ・オートクチュールの影響を大きく受け、素材や服飾副資材、縫製機器の発展と共に様々に変化を遂げてきている。1950年代はオートクチュールにおけるゴールデン・エイジ¹⁾とも呼ばれ、多くのデザイナーが「形を作る」ために工夫を凝らし、クリエイションを発表している。筆者らは、このゴールデン・エイジのパリ・オートクチュールの制作技術に着目し、その技術进行分析し、文書化・図式化して蓄積することにより、制作に迷った時に参照できる技術面の記録の蓄積を目的とした研究を行っている。2014年にクリスチャン・ディオール²⁾、2015年にクリストバル・バレンシアガのデイ・ドレス³⁾を資料とし、その制作技術の技法研究を行った結果、当時の制作技術において多くの知見を得ると共に、クリスチャン・ディオールとクリストバル・バレンシアガの制作技術の違いに、彼らのクリエイションに対する意識の違いを知ることとなった。

本研究では、ディオール社のデイ・ドレス（1957年頃作成 杉野学園所蔵）を資料として、1950年代のディオール社に多く見られるシルエットの制作技術に着目し、その制作技術の検証を行い、さらなる記録の蓄積を目的とした。

I-1 クリスチャン・ディオール (Christan Dior) のクリエイションについて

クリスチャン・ディオールは、1947年春・夏シーズンから1957年秋・冬シーズンまでの22シーズンに渡り、毎回特徴的なラインを主としたコレクションを発表した。彼が発表したラインの調査結果^{4), 5), 6), 7), 8), 9), 10)}

は、以下のようになる（表1、図1）。

表1 クリスチャン・ディオール発表ライン一覧

	春・夏	秋・冬
1947年	Corolle, En8	Corolle
1948年	Envol, Zig-zag	Ailée, Zig-zag
1949年	Trompe-l'oeil	Milieu du siècle
1950年	Verticale	Oblique
1951年	Oval, Naturelle	Longue
1952年	Sinueuse	Profilée
1953年	Tulipe	Coupola, Vivante
1954年	Muguet	H
1955年	A	Y
1956年	Flèche	Aimant
1957年	Libre	Fuseau



図1 ディオール社の代表的なライン

クリスチャン・ディオールはコレクションごとに200着以上の作品を発表しながら、上記にあるような新しいラインの作品は、ショーで発表された全作品の1部分でしかなく、人気のあるシルエットがディテールを変え、長期間作り続けられていたこと^{11), 12), 13)}は、周知である。その中でも、なだらかな肩線、豊かなバ

スト、細いウエスト、たっぷりと裾が広がったスカートの特徴とするディオールの代名詞とも言うべきコロール・ラインが作り出すシルエットは、多くの人に愛され、いつの時代においても作り続けられていた。クリスチャン・ディオールの60年間のクリエイションを収録した雑誌L'official 特別号¹⁴⁾において、クリスチャン・ディオールが直接制作指揮を行った、1947年春・

夏～1957年秋・冬コレクションに見られるコロール・ラインに類似するシルエットを調査した結果、イヴニング・ドレス、デイ・ドレス、スーツ、コートと、様々なアイテムに表現されて、毎シーズン制作され続けていたことが、以下のように確認できる（図2, 3, 4, 5）。



図2 1947年春・夏



図3 1951-52年秋・冬



図4 1954-55年秋・冬



図5 1956-57年秋・冬

II 調査

今回調査を行った資料は、以下のDior社製デイ・ドレス（図6, 7, 8）である。



図6 資料正面



図7 資料側面



図8 資料背面

II-1 調査方法について

資料の調査は、2014年度に行った「パリ・モードにおける服飾造形研究」の調査方法に準じて行った。

1) 外観についての調査

資料を詳細に写真撮影し、外観（構造・デザイン・シルエット・その他）の調査を行い記録した。

2) パターンについての調査

資料の計測は上前となる右身頃を計測の基準とし、必要に応じて左身頃の計測を行い記録した。
計測道具：定規・メジャー・レーヨン紙・シルク糸（#100）・手縫い針（#12Sharp）・シルクピン・シーチング

調査手順：

- ① 計測の基準となる線は、縦糸緯糸を目視で辿り、地の目とした。パターンの形状に合わせ、それぞれ必要と思われる位置に糸を通した。
- ② ①の手順で通した地の目を基準線とし、定規、メジャーで計測した計測値を方眼紙上に記し、連続線として繋げパターンの輪郭線とした。
- ③ ②で作成したパターンをレーヨン紙に基準線と共に写し、輪郭線の形状を確認・修正を行い、パターン確認終了後、CAD データとした。

完成パターンを使用してトワルを作成し、実物と目視で比較し、パターンの形状確認を行った。

3) 縫製方法についての調査

資料を詳細に写真撮影し、計測・縫製方法の調査を行い記録した。

4) 素材についての調査

資料の素材について調査を行い記録した。

II-2 調査結果と考察

資料(図6, 7, 8)の調査結果は以下の通りである。

1) 外観についての調査

構造：一見、ワンピースに見えるが、ペプラム付きの身頃とスカートのツーピースで構成している。身頃にはウエストから裏地と共布のペプラムが付き、ペプラムの裾には、ストッキングを固定するガーターベルトが付いている。明きは後ろファスナーで、その長さは身頃よりも長い。スカートは、別仕立てのペチコートを生蔵し、ペチコートは、スカートのウエストベルト部分にかんぬき止めで付いている。スカートは後ろ中心のタック奥にマチを入れ、左側タック奥に明きを作り、スプリングホックとスナップ止めになっている。共布のリボンが付いたベルト(表側のみ共布)は、前中心リボンの陰でかぎホック止めになっている。

デザイン：広めのボートネックラインのように着用者の体からやや離れたデコルテライン、ラグラン切り替えのなだらかな肩線の短い袖、豊かなバスト、細いウエスト、スカートのウエスト部分には、スカートのシルエットを強調するように脇よりにタックを取り、たっぷりとした裾周りのスカートになっている。

シルエット：なだらかな肩線、バストからウエストまでは着用者の体に沿っているが、スカートの裾に向かいたっぷりと広がった形状は、ニュールックに代表される、コロール・ラインのシルエットである。

その他

欠損・劣化：経年によるまつり糸の劣化によるほつれが何ヶ所もある(図9)。また、前後左右の袖付け線上にコード状のものを切り取った跡がある(図10)。

その他に目立った欠損は無い。



図9 右袖口のほつれ



図10 袖付け線上の切り取り跡

変更箇所：なし。

グリフ：身頃内側、右脇線上(カマ底より8.5cm下)に黒地に白文字が織りこまれたリボン状のグリフ(10.4cm×2.7cm)がついている(図11)。グリフの中央に“Christian Dior”その下に“PARIS”左端に“MADE IN FRANCE”の文字が織り込まれている。裏面にシリアルナンバーがスタンプされているが、全部は読み取れない。リボンの両端は三角形に折り込まれ、それぞれ3ヶ所縫っている。身頃のペプラム後ろ中心縫い代とスカートの裾に、同じような形状のアルファベットと思われる糸印があるが、判読できない(図12, 13)。



図11 グリフ(表側)



図12 ペプラム縫い代糸印

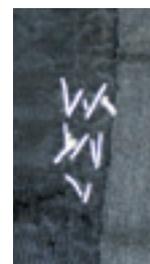


図13 スカート裾糸印

2) パターンについての調査

2)-1 パターンデータについて

調査により取得したパターンデータは、図14のようになる。

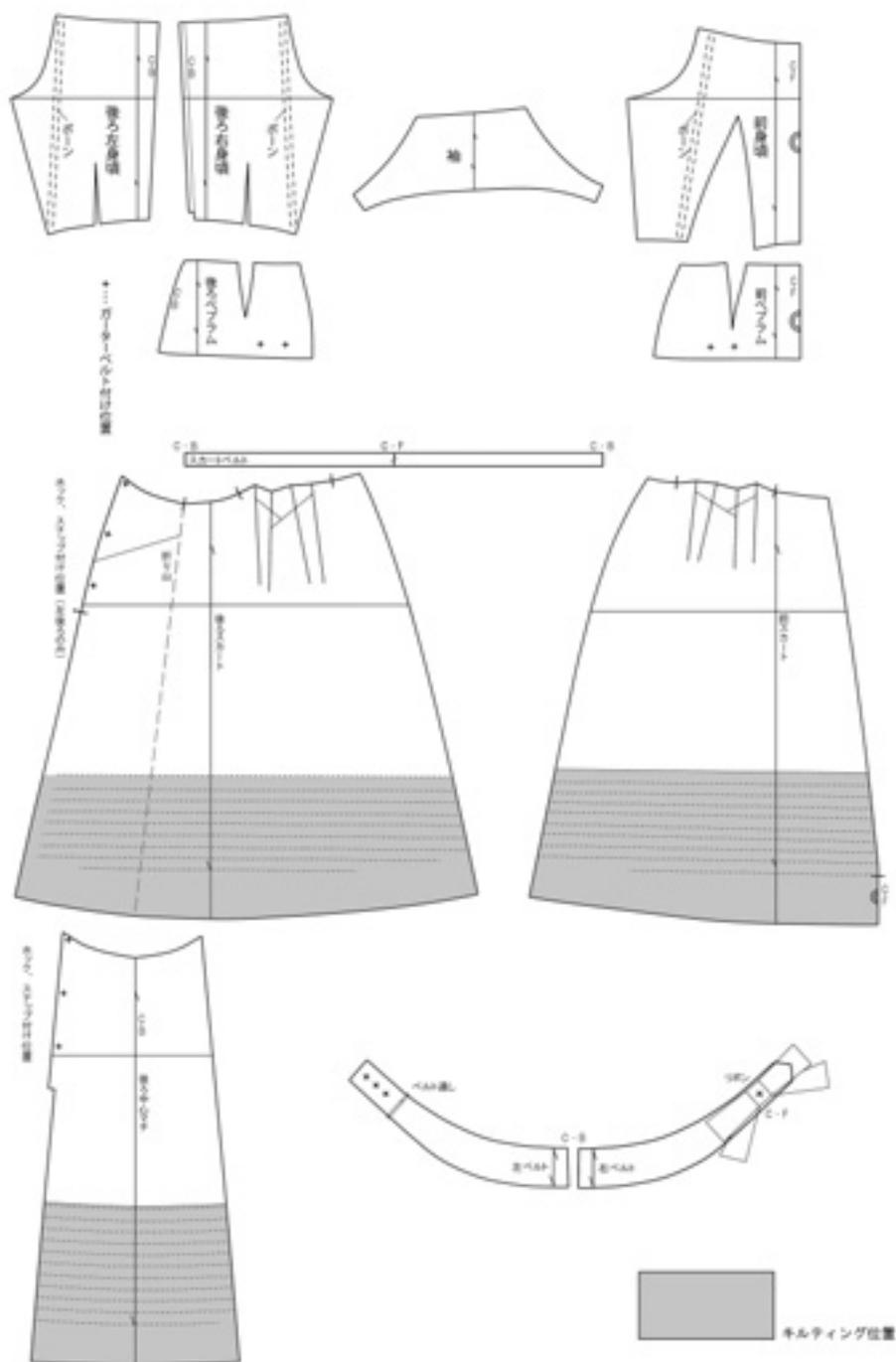


図14 身頃・袖・スカートパターン

2)-2 パターンの特徴

資料のパターンの特徴は以下の通りである(図14)。

出来上がり寸法：着丈90.5cm、バスト94cm、ウエスト(身頃)57.5cm、袖丈11.5cm、ウエスト(スカート)62cm、裾周り206cm

パターン(半身頃)は、前身頃、後ろ身頃、前ペ

ラム、後ろペプラム、袖、前スカート、後ろスカート、後ろ中心マチで構成し、現在、同様のシルエットを作図する場合に用いるパターンの形状と一致する。ウエスト寸法が身頃とスカートで4.5cmの差がある。身頃：前身頃のウエストダーツ分量を多くとることで、豊かなバスタの形状を作っている。ウエストダー

ツの分量の差が、前身頃と後ろ身頃で極端に異なっている。また、後ろ身頃のウエストラインの形状が、中心から脇に向かい強いカーブを描いているが、前後身頃のウエストダーツをたたんだ状態でウエストラインのカーブ形状を比較すると、前身頃のウエストラインもほぼ同様のカーブを描いている。

袖：ラグランスリーブの形状になっている。

スカート：スカートの下部が前中心で輪になっているため、ウエストラインから裾に向かい、前中心に大きなダーツを取っている。シルエットを作るために、ウ

エストにタックを取り、ボリュームを出している。後ろ中心にひだ奥となるマチを入れ、インバーテッド・プリーツのような大きなタックになっている。

ベルト・リボン：ベルトはカーブの形状で、後ろ中心に比べ、前中心の幅がやや細くなっている。リボンは長方形になっている。

上記で得られたパターンデータを基に、シーチングを用いて組み立て、パターンの確認を行った（図15, 16, 17）。



図15 トワフル正面



図16 トワフル側面



図17 トワフル背面

3) 縫製方法についての調査

資料の縫製方法は以下の通りである。

資料の表地は、身頃と袖はシルクオーガンジーと毛芯、スカートは前スカートと後ろマチは毛芯のみ、後ろスカートは毛芯と裏地で裏打ちしている。

身頃はデコルテラインから約1.2cm 控えた位置からウエストラインの約0.8cm 下まで、袖はデコルテラインから約1.2cm 控えた位置から袖口の縫い代部分まで裏地が付いている（図18）。裏地が付いていない部分の縫い代始末は、基本的に手縫いでかかっている。



図18 身頃内側

身頃：身頃と袖のデコルテラインは、本体から続いて折り返した見返し（約3.5cm）になっている。前身頃のデコルテライン見返しのみ、前中心、左右に4cm、さらに左右に6cm、計5ヶ所の位置で、縫い代端から約2cm 切り込みが入っている。後ろ中心とデコルテの角は額縁で始末している。脇線の縫い代（カマ底側：約1.8cm、ウエスト側：約1.5cm）は割っている。後ろ中心は、身頃から続いた状態で見返し（デコルテライン側：約5.5cm、ウエスト側：約6cm）を折り返し、フラットファスナーが付いている（図19）。裏地以外の身頃とペプラムはウエストラインをミシンで縫い、身頃の裏地をウエストラインで星止めしている。



図19 後ろ身頃デコルテラインとファスナー

ウエストラインの縫い代（約0.8cm）はペプラム側に片返し、一緒に手でかがっている（図20）。

ウエストダーツ：前後のダーツは、先端から約3cm下からウエストまで割っている（前身頃：約2.5cm）。

毛芯は、縫い目から0.8cmでカットしている。

明き始末：ファスナーの上端にはかぎホック（1組）がつき、金属製のフラットファスナー（下留め金具まで58cm）がデコルテラインより1cm下がった位置から、ペプラム下端から15.3cm下まで、手縫いで付いている（図21）。



図20 後ろ身頃ウエストライン



図21 身頃ファスナー

ボーン：長さ31cm（前身頃）と30cm（後ろ身頃）、幅0.8cmの金属製ボーンは、オーガンジーに包み毛芯にまつている（図22, 23）。



図22 ボーン先端



図23 金属製ボーン

ペプラム：脇の縫い代（約2cm）、ウエストダーツの縫い代（約0.8cm）、後ろ中心線縫い代（約2cm）は割り、手縫いでかがっている。裾は共布の見返し（約4cm）が付き、見返し部分にはステッチ（11本）がかかっている（図24）。ペプラムの下端には、ガーター

ベルト用のボタン（直径0.9cm）が全体で8個、ガーターベルト（1.9cm幅）が付いている（図25）。



図24 ペプラム裾 ステッチとガーターベルト付けボタン



図25 ペプラム裾 ガーターベルト

袖：袖付け線は、前後共デコルテラインより約8cm下の位置で縫い代（約1cm）に切込みが入っている。デコルテラインから切込みまでの縫い代は割り、カマ底部分の全ての縫い代は裏地身頃の上に乗せ、袖の裏地を星止めし、千鳥がけで裏地身頃に止めている（図26）。



図26 袖付け線 袖底部分

袖口の縫い代は、裏打ちのオーガンジーを続けて持ち出し、0.3cm幅のパイピングで始末している（図27）。



図27 袖口パイピング始末

スカート：前中心のダーツの縫い代（ウエスト側：約2.5cm）は、ウエストからダーツの先端から約3cmまで割っている（図28）。脇線の縫い代（3.5cm）は割っているが、後ろスカートと後ろ中心マチの縫い代（1.2cm）は、後ろ中心のタック奥で一緒にかがっている（図29）。前中心のダーツと脇線の裏打ちの毛芯は、ミシンの際で切り取っている。



図28 前中心縫い代



図29 後ろスカートと後ろ中心マチ縫い代

裾のキルティング：前スカートと後ろ中心マチは、毛芯の裾部分にミシンステッチ（約2cm間隔）でキルティングされた裏地が付いている。キルティングの上端は毛芯に千鳥がけし、下側は裾まで入っている。後ろスカートは、裾の部分にキルティングした裏地が全面に付いている。キルティング部分は前スカートのキルティングとミシンで縫われ、縫い代は割っている。キルティングの無い部分は、前スカートの脇縫い代に手縫いでまつっている（図30）。



図30 裾のキルティング 脇線の接ぎ

タック：前後にあるタックは、中心側のタックに重なるように脇側のタックをたたんでいる（図31）。裏打ちの毛芯は、タック位置や後ろ中心で、表生地に糸で固定している（図32）。後ろスカートは、裏地も一緒に固定している。



図31 スカートタック 表側



図32 スカートタック 裏側

明き始末：後ろ中心タック左側奥が明きになっている。明きの長さは24cm、一番上がスプリングホック、それ以外はスナップ（直径0.6cm）が2組、8cm間隔で付いている。明き部分の縫い代はパイピング（0.4cm幅）で始末されている（図33）。



図33 スカート明き始末

裾始末：裾は縫い代（約5.5cm）の端を裏側に折り込み（約1.5cm）、小さくタックを取りながらまつている。毛芯は、縫い代幅より約0.5cm控えた位置でカットしている。裾線から縫い代側に0.2cmと1cmの位置で、縫い代側から毛芯まで星止めしている（図34）。



図34 裾始末 タックと星止め

ペチコート：ペチコートは、異なる硬さのチュールがギャザーを寄せた状態で2段（下段チュール：裾周り372cm、上段チュール：裾周り505cm）、前スカート部分のみさらに1段（175cm）ヨークに付いている。上段のチュールと前側のチュールの裾にはホースヘア（8cm幅）が入っている（図35）。

前後スカートと同形のパターンで作られたスカートが、チュール全体を覆っている。

後ろ中心の明きにはスプリングホックが5組付いている。ペチコートとスカートは、ベルト位置で5ヶ所かんぬき止めで付いている（図36）。

リボン・ベルト：ベルトは表地と共布で作られている。ベルトは、表側が共布、裏側が革で作られている（図37）。



図35 チュール裾



図36 かんぬき止め



図37 リボン・ベルト

4) 素材についての調査

資料には以下の素材が使用されている（表2）。

表2 素材基礎測定

	生地名	色	素材	密度（本/cm）		厚み（mm）	特徴
				経	緯		
表地	ウールシャンタン	濃いグレー	ウール	27	26	0.30	ざっくりとして柔らかい
裏打ち布1	オーガージー（身頃・袖）	黒	シルク				薄く張りがある
裏打ち布2	毛芯（身頃・袖・スカート）	生成り	ウール	17	15	0.39	柔らかくしっかりしている
裏地1	シルク（身頃・袖）	黒	シルク	72	84	0.14	薄く柔らかい
裏地2	タフタ（スカート）	黒	ポリエステル	34	47	0.23	厚みと張りがある

測定機器：マイクロメーター、分解鏡

副資材：身頃には金属のボーン（図23）を使用している。また、スカート裾部分のキルティング状の裏打ち部分は、毛芯と裏生地の上に薄いウール繊維のような芯を挟んでいる。ペチコートは裾にはホースヘア（8cm幅）が入っている。

5) 調査のまとめと考察

調査の結果、以下のことが確認された。

外観：一見、ワンピースに見えるが、ペプラムつきの身頃とスカートのツーピースで構成されている。身頃のウエストから下には、裏地と共布のペプラムが付く、ペプラムの裾には、ストッキングを固定するガーターベルトが付いている。ガーターベルトが付くことで、手を上げても身頃の裾が表に出ないようにしている。ペプラム部分の素材は、身頃と同じ生地を使用した場合、厚みが出てシルエットが崩れる可能性と着心地を考慮し、裏地を使用したと考えられる。資料は、広めのボートネックラインのように着用者の体からやや離れたデコルテライン、なだらかな肩線のラグラン袖、豊かなバスト、細いウエスト、大きく裾が広がるなどの特徴から、ニュールックに代表される、コロル・ラインのシルエットであると考えられる。

パターン：前後身頃のダーツ分量に大きな差はあるが、現在、同様のシルエットを作図する場合に用いるパターンの形状と一致する。前スカートはウエストラインから裾に向かい、前中心に大きなダーツが取られている。シルエットを作るために、ウエストにタックを取り、ボリュームを出している。スカートの前中心を輪にして大きなダーツで裁断する方法は、1950年代の大きく広がったスカートに比較的多く見受けられる裁断方法の特徴である。身頃とスカートのウエスト寸法の差は、スカートの布の厚みと内蔵されたペチコートの厚みによるものと考えられる。

縫製方法：身頃と袖に使用されている表地は、シルクオーガンジーと毛芯により裏打ちが全面に行われ、前後身頃の脇よりの部分に金属製のボーンが入っている。スカートは表地を全面毛芯で裏打ちし、裾の部分にキルティングした生地が付いている。裏打ち布やボーン、ペチコートのような二次的な構造により、素材を補強し、デザイナーが意図したシルエットを作り出す効果を得ている。スカートの裏打ちの毛芯や裏地を、タック位置や後ろ中心で表地に糸で固定することで、タックや後ろ中心の位置を明確にすることが可能になる。また表地と裏打ち布が折り目の厚みによりずれることを防ぎ、形を保つ効果があると考えられる。

素材：表生地よりも裏打ちの毛芯の方が、厚みがあるが柔らかさがあるため、表地の特徴を活かしながらシルエットを作っていると考えられる。

資料は、豊かなバストと細いウエストを強調し、裾に向かって広がるコロル・ラインのシルエットを有していることが、外観とパターンの調査から確認できた。表地のウールが柔らかいため、表地単独でシルエットを保つことは難しく、毛芯とオーガンジーで裏打ちすることにより強度を与え、身頃にボーンを入れることでドレスのシルエットを保っていることが確認できた。また、ペチコートやスカートの裾にキルティングをすることで、裾に向かって広がるスカートのシルエットを明確にしている。

III 制作技術の検証

III-1 試作による検証箇所

本研究は、1950年代のディオール社に多く見られるシルエットの制作技術に着目し、その制作技術の検証を行うことを目的としている。Golden Age of the Couture では、「ディオールは、彼のデザインをよりよく表現するために、伝統的なテクニックを使用し、素材をしっかりとさせるために芯で服に裏打ちをした。これらの二次的な構造の理由は、ドレスの重さを支えるためではなく、完璧なライン、あるいは引き離れたデコルテやバスクのようなカーブを作るためであった。」¹⁵⁾と記述している。上記の視点に立って今回の資料を見ると、以下の点が確認できる。

①表地として薄手のウールを使用しているが、生地よりも厚みのある毛芯とオーガンジーによって全身を裏打ちすることで、デザイナーが意図したシルエットを作っている。特にスカートは、毛芯とオーガンジーによる裏打ちの他に、裾部分をキルティングによってさらにしっかりと裏打ちし、そのシルエットを作り出している。さらに裾にホースヘアを入れた別仕立てのペチコートを内蔵することで、シルエットの保形性を高めていると考えられる。

②着用者の体に密着しない身頃の前後脇よりの位置で身頃に直接ボーンを付けることにより、シルエットを支えていると考えられる。

以上の点において資料のデイ・ドレスは、1950年代のディオール社の典型的な制作技術により作られていると判断される。また、その技術の中でもスカートのシルエットに関する制作技術は、現在でも一般的に使われる技術であり、内蔵されているペチコートの素材、縫製方法などに特別な違いは見られない。一方、身頃に直接ボーンを着けることは、現在ではビュスティエドレスなどのような着用者の体に密着した形のドレスなどには見られるが、着用者の体に密着しないデイ・ドレスに着けることはほとんどない。そこでボーンを付ける事により、着用者の体に密着しない身

頃のシルエットにどのように効果があるのかという点に着目した。

資料調査結果にあるように、ボーンの位置は、図14の資料パターンにあるように、前身頃はウエストダーツのやや脇よりの部分から、身頃のデコルテと袖付け線のやや中心側の位置、ウエストからデコルテに向かい広がるように入っている。後ろ身頃は、脇線とウエストラインの交点から、後ろ身頃のデコルテと袖付け線の交点に向かってほぼまっすぐ入っている。このように、ボーンは前後で異なる位置に入っている。使用しているのは同じ形状の金属ボーンである。一般的にビュスティエなどでボーンを入れる場合、体の前後中心や脇などの体を支える位置、バストを支える位置、前面と側面の角や側面と背面の角など、いわゆる体の面といわれる位置に入れることが多い。ボーンは硬い素材で作られるため、ボーンを入れた部分が支えとなり縦方向に補強され、布に緊張感を与えシルエットがすっきりする効果がある。しかし資料のように着用者の体に密着しないシルエットにおいてボーンを入れる理由として、シルエットを支えることが目的であると考えられる。ここでは、ボーンを入れる位置により、シルエットにどのような差が出るのかに着目して検証を行う。また、ボーンがデコルテラインに達していることから、デコルテラインへの影響も観察した。

Ⅲ-2 試作の制作方法

検証には、Ⅱ-2-2) パターンについての調査で取得した身頃のパターンを用い、縫い代は資料と同様

に裁断した。

試作には服飾造形においてシルエットなどの形状を確認するとき一般的に用いられるシーチングを使用して作成した。資料は表生地と裏打ちとなる毛芯、オーガージーで構成されているため、表生地にあたるシーチング1枚だけでは同様の形状を作ることが困難と考え、厚さの異なるシーチングを裏打ち布として使用し、毛芯の代わりとした。オーガージーに関しては、シルエットを作るうえでの影響は少ないと考え、使用しなかった。

使用したシーチングの基礎測定は、以下の通りである。

表3 使用シーチング基礎測定

使用箇所	密度(本/cm)		厚さ(mm)	目付け(g/m ²)
	経	緯		
表地	24	26	0.25	111
裏打ち布	24	23.5	0.31	161

測定機器：マイクロメーター、分解鏡、電子デジタル天秤

検証では、前後身頃に入れられたボーンの位置を、資料に付いていた位置を参考に以下の4種類の位置
 ①資料と同じ位置に入れる場合(図38) ②前身頃の位置と同様、前後共にダーツ脇の位置からボーンを入れる場合(図39) ③後ろ身頃の位置と同様、前後共に脇線とウエストの角から入れる場合(図40) ④ビュスティエに多く見られるように、ダーツ上にボーンを入れる場合(図41)に設定し、ボディに装着させ、そのシルエットの違いを目視により比較した。



図38 ①資料と同じ位置に入れる場合



図39 ②前身頃の位置と同様、ダーツ脇の位置からボーンを入れる場合



図40 ③後ろ身頃の位置と同様、脇線とウエストの角から入れる場合



図41 ④ビュスティエに多く見られるように、ダーツ上にボーンを入れる場合

Ⅲ-3 結果および考察

検証結果は、以下の通りである。

正面



図42 ①資料と同じ位置に入れる場合



図43 ②ダーツ脇から入れる場合



図44 ③脇線とWの角から入れる場合



図45 ④ダーツ上に入れる場合

①はバストからウエストにかけてのシルエットがすっきりしている。②は①と同じである。③は①と比べ、バスト付近の幅がやや広く見える。④はダーツに向かい脇方向から斜めにしわが入るが、①②③に比べ、全体に細く見える。

側面



図46 ①資料と同じ位置に入れる場合



図47 ②ダーツ脇から入れる場合



図48 ③脇線とWの角から入れる場合



図49 ④ダーツ上に入れる場合

①前後共にバストラインからデコルテラインがボディに沿ってくる。②は①に比べ、後ろのデコルテラインがボディから離れている。③は①に比べ、前のデコルテラインがボディから離れている。④は、前後のデコルテラインがボディから離れている。前身頃はウエストのやや上の位置からボディから離れ始め、バストの最も高い位置あたりからデコルテラインにかけては直上している。また背中丸みが強く、前後に体の厚みを感じさせる。

背面



図50 ①資料と同じ位置に入れる場合



図51 ②ダーツ脇から入れる場合



図52 ③脇線とWの角から入れる場合



図53 ④ダーツ上に入れる場合

①はバストからウエストにかけての脇線がすっきりしている。②は①に比べ、バストライン付近が広がり、脇線がやや丸みを帯びて見える。③は①と同じである。④は、①②③に比べ、全体に細く見えるが、背中にふくらみがある。

正面、側面、背面の各写真を比較すると以下のことが検証できた。

- ①資料と同じ位置にボーンをいれる場合：どの角度から見ても最もバランスが美しく見える。ウエストからバストラインにかけてシルエットがすっきりしている。また側面では、ボディに対し前後共にデコルテラインが沿っている。
- ②前身頃の位置と同様、前後共にダーツ脇の位置からボーンをいれる場合：正面のシルエットは良いが、側面では後ろ身頃のデコルテラインが着用者の体から離れ、背面ではバストラインの幅が広く見える。
- ③後ろ身頃の位置と同様、前後共に脇線とウエストの角から入れる場合：正面のバストラインの幅が広く見える。側面では前身頃のデコルテラインが、ボディから離れている。背面のシルエットは良い。
- ④ビュスティエに多く見られるように、ダーツ上にボーンをいれる場合：正面・背面のシルエットは、①～③よりも全体に細く見えるが、側面では前後に広がり、体の厚みや丸みがでる。また、デコルテラインがボディから離れてしまう。

以上の検証から、着用者の体に密着しないシルエットにおいて、ボーンを入れる位置により、シルエットに差が出ることを確認できた。

前身頃のボーンの位置：ビュスティエを制作するときにはバストが広がらないように、資料と同じようにダーツ脇から斜めにボーンを入れることがあるが、同様にバストが広がるのを抑えシルエットをすっきりと作ることを意識したものと考えられる。

後ろ身頃のボーンの位置：脇線とウエストの角からボーンを入れることにより、脇線の膨らみを抑えてシルエットを作ることを意識したと考えられる。

デコルテライン：ダーツの上にボーンが置かれると、ビュスティエの様に着用者の体に密着しない場合、体から離れ、空間を作ることになるため、前身頃はウエストからデコルテラインに向かい広がるようにすることで、バストの上にデコルテラインが乗るように納まっている。後ろ身頃は、脇側にほぼまっすぐ入ること、肩甲骨の影響を受けることなく、デコルテラインを支えているという理由によるものと考えられる。

以上の理由により、資料のボーンの位置は、このデザインのシルエットを支えるために適した位置に入っていることが確認できた。

IV まとめ

調査・検証の結果、以下の項目が明らかになった。

資料調査結果

- ・資料は広めのポートネックラインのように着用者の体からやや離れたデコルテライン、ラグラン切り替えの短めの袖、豊かなバスト、細いウエスト、大きく裾が広がり、ニュールックに代表される、コロール・ラインのシルエットである。
- ・パターンは現在、同様のシルエットを作図する場合に用いるパターンの形状と一致する。
- ・縫製方法は表地を裏打ちすることにより、デザイナーが意図したシルエットを作っている。
- ・前後身頃にデコルテラインからウエストラインにかけてボーンを入れることで、着用者の体に密着しない身頃のシルエットを支えている。

試作検証結果

- ・身頃に入れたボーンは、前身頃はバストが広がるのを抑え、後ろ身頃に入れたボーンは、脇線が膨らむのを抑えている。また、着用者の体からデコルテラインが離れすぎないように支える効果もある。

以上の技術は、制作技術の経験値を補うために、記録として蓄積すべき技術であると考えられる。

V おわりに

本研究は、クリスチャン・ディオールの1950年代に多く見られるシルエットの制作技術に着目し、詳細な調査、試作による検証を行った。実際に調査、検証することは、文献で知識を得ることだけでは得られなかった制作技術の意味を真に理解することにつながるものであると感じている。

今回の造形研究では、「形を作る」ために必要とされる技術を、消滅する前に検証し記録を蓄積することが当初の目的であった。しかし調査を重ねるうちに、現在の制作技術と同様の技術を資料の中に見いだすことも少なくなかった。「形を作る」ために必要な技術はいつの時代でも同じなのかもしれない。そう考えると、1950年代の技術を記録し蓄積することは、将来の制作技術を支えることにつながると思われる。

今後は「形を作る」ために必要とされる制作技術を将来に受け継ぐべきものとして、検証し記録する造形研究を更に進める。それと共に、これからの日本のファッションにおいて、これまでの研究により蓄積されたゴールデン・エイジのパリ・オートクチュールの制作技術を活かす方法についても、新たな研究課題として取り組んでいきたい。

註

- 1) Claire Wilcox (Ed.), *The Golden Age of Couture Paris and London 1947-57*, V&A Publications, London, 2007.
- 2) 安部智子 林綾美 平野紗江 森淳子, 「パリ・モードにおける服飾造形研究—1950年前後制作デイドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 13』, 2015, pp. 14-30.
- 3) 安部智子 水野真由美 森淳子 田口雅子, 「パリ・モードにおける服飾造形研究2—1959年前後制作デイドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 14』, 2016, pp. 1-15.
- 4) 杉野芳子著, 『ディオール』, 日本書房, 1959.
- 5) ブリジット・キーナン著, 金子桂子訳, 『クリスチャン・ディオール1947-1957 Dior in Vogue』, 文化出版局, 1988.
- 6) シャルロット・シンクレア著, 和田侑子訳, 『VOGUE ON クリスチャン・ディオール』, ガイアブックス, 2013.
- 7) Richart Martin and Harold Koda, *Christian Dior*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1996.
- 8) Annie Goetzinger, *Girl in Dior*, NBM, NY, 2015.
- 9) シャルロット・ゼーリング編, 川西和世 森川智子訳, 『FASHION 20世紀のファッションデザイナー1900-1999』, KÖNEMANN, 2001.
- 10) Wikipédia Christian Dior
https://fr.wikipedia.org/wiki/Christian_Dior
- 11) クリスチャン・ディオール著, 上田安子・穴山昂子共訳 『一流デザイナーになるまで』(復刻版), 牧歌舎, 2008, p. 96.
- 12) クリスチャン・ディオール著, 朝吹登水子訳, 『私は流行をつくる』, 新潮社, 1953, p. 69.
- 13) マリー＝フランス・ポシュナ著, 高橋洋一訳 『クリスチャン・ディオール』, 講談社インターナショナル株式会社, 1997, p. 369.
- 14) *L'officiel 1000 Modèles No. 81*, Les Éditions Jalou, France, 2008.
- 15) 註1) に同じ, p. 148.

図版出典

- 図1 Charlotte Seeling, *La Mode Au Siecle des Createurs 1900-1999*, KÖNEMANN, 2000, p. 261.
- 図2 註1) に同じ, p. 61.

- 図3 *L'officiel 1000 Modèles No. 81*, Les Éditions Jalou, France, 2008, p. 22.
- 図4 *L'officiel 1000 Modèles No. 81*, Les Éditions Jalou, France, 2008, p. 35.
- 図5 *L'officiel 1000 Modèles No. 81*, Les Éditions Jalou, France, 2008, p. 44.

参考文献

- ・南静著 『パリ・モードの200年 第二次世界大戦から現代まで』文化出版局, 1990.
- ・鈴木美和子他著 『平成19年度～21年度 私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター研究報告「現代衣装の原点を探る」—ウォルト作品の復元』杉野服飾大学, 2010.
- ・北折貴子他著 『平成23～25年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究成果報告書「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」』杉野服飾大学, 2014.
- ・鈴木美和子他著 「ジャック・ドーセのジャケットとスカートの服飾造形調査研究 I—杉野学園衣装博物館収蔵品より—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 12』, 2013.